

高等学校地理AにおけるESDを取り入れた授業実践 — 人権・文化の多様性と異文化理解の視点から —

児玉 和優

(名古屋市立大高中学校)

I はじめに	IV 考察
II 地理AにおけるESDの授業開発	V おわりに
III 地理AにおけるESDの授業実践	

キーワード：ESD，行動の変革，異文化理解，中国人理解，プロジェクト提案

I はじめに

ESD（持続可能な開発のための教育）とは、「世界に存在する環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な問題や現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動である。つまり、持続可能な社会づくりの担い手を育む教育」¹⁾ある。

ESDの目標は、「すべての人が質の高い教育の恩恵を享受し、また、持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれ、環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすことであり、その結果として持続可能な社会への変革を実現すること」²⁾とされている。

先行研究においては、「我が国における『国連持続可能な開発のための教育の10年』実施計画」³⁾が示しているESDの内容のうち、「社会的寛容」「公正で平和な社会」の面、つまり、UNESCO(2004)⁴⁾が示す「人としての人権」や「文化の多様性と異文化理解」の視点からアプローチしていくESDの研究は伊藤・北堀・三野(2012)⁵⁾、永田成(2011)⁶⁾をはじめ、いくつか報告されている。しかし、「環境の保全と回復」や「天然資源の保全」などの環境面からアプローチしていくESDの研究・実践に比べるとその数は少ない。

また、学習者がESDの目標である「世界の人々や将

来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を変革する」ことを達成できているかどうかを報告した先行研究はほとんどない。

以上のことから、本研究の目的は、高等学校地理Aにおいて、人権や文化の多様性と異文化理解の視点からアプローチするESD授業の開発・実践を行い、学習者が自らの行動を変革するまでに至る過程を調査し、ESDの有用性を考察することである。

授業実践では、我々が日本の社会において、持続可能な発展を可能にするために協力していかなければならない中国人を取り上げる。将来、日本と中国それぞれが発展していくためには、お互いに協力していく必要がある。そのために、互いの人権を尊重し、異なる文化を理解することで、中国人に対して友好的に関わろうとする態度を養うことを目指す。また、生徒に日本人と中国人の友好の架け橋となるためのプロジェク

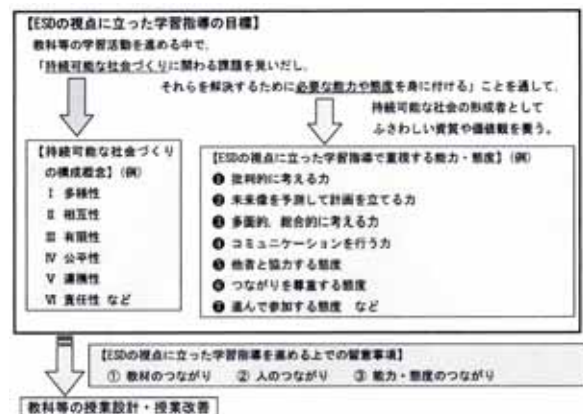


図1 ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み

(国立教育政策研究所(2012):「学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究 最終報告書」p.4より引用)

トを提案させることで、生徒の行動の変革を促したい。

その方法として、国立教育政策研究所 (2012)⁷⁾が、ESD の学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組みとして提案したもの (図 1) にもとづき、ESD の授業開発を行う。そして、それをもとに高等学校で授業実践やアンケート調査などを行い、人権や文化の多様性と異文化理解の視点からアプローチする ESD 授業の有用性を検証・考察していく。

II 地理 A における ESD の授業開発

1. ESD と国際理解教育について

「人権・文化の多様性と異文化理解」の視点からアプローチする ESD 授業を開発するにあたって、ESD と国際理解教育との関連について言及する。

米田 (2010) は、「基本的に ESD はこれまでのユネスコの国際理解教育改革の延長上にあり、ESD の基本方針や考え方、生き方のキーワードのいくつかはすでに日本の国際理解教育においても実践されてきている」⁸⁾としている。ESD と国際理解教育は、根底の概念は同質であり、文部科学省⁹⁾をはじめ、ESD は国際理解教育を包括した型で捉えられていることが多い。

永田佳 (2010) は、「国際理解教育で希求されるような平和への道、そして ESD において探求される持続可能な未来への道」¹⁰⁾という表現をしている。筆者は、既存の国際理解教育が目指すところは国際平和を希求し行動を起こしていくことであるが、ESD が目指すところは、国際平和をもとに持続可能な未来を考え、行動を起こしていくところであると解釈する。

これらの点に留意し、ESD 授業の開発を行っていく。

2. 単元「日本人と中国人との友好の架け橋となろう」

(1) 単元の意義・ねらい

本単元では、我々が日本の社会において、持続可能な発展を可能にするために協力・友好関係を築いていかなければならない中国人を取り上げる。将来、日本と中国それぞれが発展していくためには、お互いに協力していく必要がある。そのことを貿易などの地理的視点や歴史的・文化的視点、経済的視点などからアプローチし、生徒に理解させる。

そして、お互いが協力し合い、持続可能な発展を遂げるため、互いの人権を尊重し、異なる文化を理解することで、中国人に対して友好的に関わろうとする態度を養うとともに、生徒自身が日本人と中国人の友好の架け橋となることのできるプロジェクトを提案させ、

行動の変革を促すことを目的とする。

(2) ESD の視点

図 1 に示した ESD の学習過程を構想し展開するために必要な枠組みにもとづいて、本単元において特に重視する ESD の視点を整理したものを以下に示す。

<持続可能な社会づくりの構成概念>

- IV 公平性…中国人に対する偏見解消・権利の保障
- V 連携性…日本と中国との友好関係構築の必要性
- VI 責任性…日中友好・持続可能な社会構築に向けた一人一人の働きかけ

<重視する能力・態度>

- ① 批判的に考える力…中国や中国人に関するメディア等が発信する情報をそのまま受け入れるのではなく、客観的事実にもとづく判断ができる。
- ④ コミュニケーションを行う力…中国人との交流や討論、ディベート、プロジェクト提案を行う際に積極的に自分の考えを主張したり、他者と意見交換をしたりすることができる。
- ⑦ 進んで参加する態度…日本人と中国人の友好の架け橋となることのできるプロジェクトを提案し、進んでそのプロジェクトを実現しようと努めることができる。

<留意事項>

① 教材のつながり

日本と中国との関係を貿易や環境などの地理的視点だけでなく、中国に関する報道や中国人に対する偏見などの国際理解的な視点、日本人と中国人との交流などからアプローチすることで、日中友好関係構築の必要性について気づかせる。

② 人のつながり

実際に日本人と中国人との交流を通し、中国人に対する偏見を解消し、客観的事実にもとづく判断ができるようにする。また、グループでの討論やディベート等を取り入れることにより、他者の考えを尊重したり、共感したりすることの大切さや共に学ぶことの大切さに気づかせる。

③ 能力・態度のつながり

日本と中国が持続可能な発展を遂げるために、互いの人権を尊重し、異なる文化を理解することで、中国人に対して友好的に関わろうとする態度を養うとともに、生徒自身が日本人と中国人の友好の架け橋となることのできるプロジェクトを提案させ、行動の変革を促す。

(3) 単元目標

- 多くの日本人が中国人に対して偏見を持っていることに問題意識を感じ、主体的にこの問題について考えたり、話し合ったりしようとする事ができる。(関心・意欲・態度)
- 日本と中国が密接な関係であることを、貿易や文化的交流、歴史的背景などをもとに理解することができる。(知識・理解)
- ディベートにおいて、資料や自ら調べたことを根拠に、自分の意見をまとめたり、発表することができる。(技能)

- 中国人と友好関係を築くために、中国人に対する偏見を解消し、日本と中国が持続可能な発展を遂げるためにどうしていくべきかということについて、考えたことをもとにして話し合い、自分たちの考えをレポート用紙等にまとめ、発表することができる。(思考・判断・表現)

(4) 指導計画

単元の意義や単元目標などをもとに、7時間完了の指導計画を立てた。指導計画を表2に示す。

表2 単元「日本人と中国人との友好の架け橋となろう」 指導計画

時数	主な学習活動	評価	指導上の留意点
1	問題の提示 ○ アンケートの実施 ○ 問題の提示 「多くの日本人は中国人に対して良い印象を持っておらず、偏見を持っているのではないか？」	関	・事前に一般人を対象とした中国人理解に関するアンケートを実施する(事前アンケート)。 ・実践を行う生徒を対象とし、中国人理解に関するアンケートを行う。 ・事前のアンケート結果をもとにした資料を提示する。 ・発問や板書をし、資料をもとに問題を理解させる。
2	問題への理解 ○ 問題への理解 「どうして中国人に対する印象は良くないのだろうか？」 ○ 討論 「なぜ中国人に対する印象は良くないのだろうか？」	関	・グループ(4~5人)を作る。 ・前時に行ったアンケート等をもとに問題提起をする。 ・グループでの討論、全体での発表を行うことで「コミュニケーションを行う力」を向上させる。 ・グループで話し合ったことを発表し、共有させる。 ・他のグループの発表を聞くことで、多様な視点から問題にアプローチし、多様な考えを取り入れさせる。
3	現場への共感 ○ 中国人留学生との交流 (1) アイスブレイクを行う。 (2) コミュニケーション活動を行い、交流を深めるとともに、中国人の考えに触れる。 (3) 自分たちが考えた質問を中国人留学生に投げかける。	関	・ゲストティーチャーとして中国人留学生を迎える。 ・多くの日本人が中国人に対して偏見を持っている問題について、実際に中国人とコミュニケーション活動や対話を通じて実際に中国人と交流をし、理解や関心を深めさせる。 ・各グループに1~2人の中国人留学生を配置する。
4	ディベート準備 ○ ディベートの説明 テーマ:「中国人と友好的な関係を築いていくべきか？」 ○ グループ学習・ディベート準備	知 技	・パソコン室の使用。 ・ディベートのルールや進行方法などを確認する。 ・肯定側と否定側に分ける。 ・グループで調べ学習等を行わせる。 ・「地理的視点(貿易・観光・環境など)」「歴史的視点」「経済的視点」などの具体的な視点を与え、関連事項を調べさせる。 ・調べたことや前時で実際に中国人と交流して分かったことなどを根拠にするよう指示を出す。
5	ディベート ○ ディベート 「中国人と友好的な関係を築いていくべきか？」	技 思	・肯定側と否定側に分け、ディベートさせる。 ・根拠を明確にし、立論をするように指示する。 ・あえて否定側を置くことで、「批判的に考える力」の向上を目指す。 ・プロジェクト提案につなげるために、「日本と中国が持続可能な発展を遂げる」というESDの視点に目を向けさせる。
6	問題の捉え方と問題に対する解決策の表現 ○ プロジェクトの大テーマを知る 大テーマ:「日本人と中国人の友好の架け橋となるために私たちにできることは何だろう」 ○ プロジェクト企画	思	・各グループが、これまでの学習をもとに、問題解決にむけた小テーマを決め、具体的な解決策を考えさせる。 ・次時のプロジェクト提案に向けて、グループで話し合わせ、プロジェクト企画・発表準備をさせる。
7	プロジェクト提案(発表会) ○ 発表準備 ○ プロジェクト提案	思	・グループで考えた企画を模造紙や画用紙等にまとめ、発表ができる準備を整えさせる。 ・グループごとに、全体に向けて考えたプロジェクトを発表する。

※評価: 関…関心・意欲・態度 知…知識・理解 技…技能 思…思考・判断・表現

Ⅲ 地理 A における ESD の授業実践

1. 実践校における単元観

(1) 実践校について

実践は東京都立千早高等学校で行った。しかし、諸事情により、地理 A の授業ではなく、学校設定科目「コミュニティデザイン」での実践となった。コミュニティデザインは、自分の身の回りのコミュニティ(社会)に関心を持ち、社会について自分から考え、周りの人と共に、協力し、行動する力を育むことを目指す授業である。ESD の目的と近い科目であるため、良い環境で実践を進めることができた。

当校は、東京都豊島区に位置し、東京の中でもチャイナタウンとして有名な池袋駅から 2 駅進んだ千川駅を最寄りとしている。東京は日本で最も在留中国人数が多く、全国の約 4 分の 1 の割合を占めている(2012 年 12 月現在)¹¹⁾。その上、豊島区は東京 23 区内の中で 2 番目に在留中国人数が多い(2013 年 10 月 1 日現在)¹²⁾。以上のことから、当校の生徒は日常的に中国人と何らかの形で関わることが比較的多いと考えられる。したがって、本実践を当校で行うことは有意義である。

(2) 生徒観

今回担当するクラスは、高校 2 年生(男子 1 名・女子 19 名の計 20 名)のクラスであり、外国人生徒も在籍し、様々な視点で異文化理解について考えることができると期待できる。

また、本クラスの生徒は、自分の意見を主張したり、グループ活動等にも積極的に取り組んだりすることができ、過去の授業で数多くの発表活動を経験しており、プレゼンテーション能力も高い。

しかし、問題や疑問に思ったことを解決しようという意欲や態度はあまり強くなく、ノート等を見ても感想や分かったことのみを記入する生徒が多い。

そこで、本単元では、グループ活動を積極的に取り入れ、討論やディベート等をさせていく中でコミュニケーション能力や批判的思考力を身に付けさせたい。また、発表活動も取り入れることで、表現力も伸ばしたい。そして、「将来日本と中国が友好関係を築くために、私たちにできることはないか」というプロジェクト提案を行わせ、進んでそのプロジェクトを実現しようとする態度を育てたい。

2. 中国人理解に関する事前調査

本単元を進めるにあたって、20 代から 50 代の成人

を無作為に抽出し、中国人理解に関するアンケートを行った(回答数 75)¹³⁾。このアンケートの目的は、世間の中国人に対する偏見の実態を明らかにし、偏見を持ってしまう原因を見つけるためのものである。このアンケート結果をもとに生徒に対し、問題提起を行いたい。質問事項とその結果の一部を表 2 にまとめた。

「中国人に対する印象」を問う質問では、「ふつう」と「悪い」に回答が集中した。理由に注目すると、「良い」「ふつう」と答えた人の中によく見られたのが、「知り合いになった中国人がだいたいいい人たち」というような、身近な中国人の印象から判断したものだった。また、「関わったことがないから判断できない」といった理由も多くあり、報道やイメージで判断しない人もたくさんいることが分かった。

一方で、「悪い」「とても悪い」と答えた人の理由をみると、直接関わったことは無いが、報道や通りすがりの中国人の行動から判断し、良い印象が持てないといった傾向が見られる。「実際に中国人と関わる機会の有無」を問う質問に対する回答を見ても、「ふつう」と答えた人であり中国人と関わらないという人は 70% なのに対し、「悪い」と答えた人は 87% にも及ぶ。直接あまり関わったことが無いのに、メディアなどの情報から勝手に中国人の印象を決めてしまっている人がいるということが分かった。つまり、中国人という大きなくりに対して偏見を持っている日本人が少なからずいると考えられる。

以上のことを、生徒に問題として提起し、導入部分の教材としてこのアンケート結果を使用する。

3. 授業実践の様子

(1) 生徒に行ったアンケートについて

第 1 時の導入部分において、今後の授業や調査を進めるためのアンケートを行った。アンケートの質問事項と結果の一部を、表 3 にまとめた。

結果は、表 2 と同じようになった。理由に注目すると、中国人と関わりがあったり、中国の文化に愛着があったりする生徒の中国に対する印象は悪くない。しかし、あまり印象が良くない生徒は、報道やイメージで判断してしまっていると思受けられる。Q3 の中国人と関わる機会についての質問の結果を見ても、そのことが分かる。したがって、今回実践を行うクラスの中にも中国人に対して偏見を持つ生徒がいるということである。

表2 中国人理解に関する事前アンケート質問事項と結果 (2013年9月実施, 筆者の調査による)

中国人理解に関する事前アンケート (対象: 20代から50代男女 回答数: 75)				
Q1 あなたの中国人に対する印象を教えてください。(選択肢: とても良い, 良い, ふつう, 悪い, とても悪い)				
【結果・理由】(一部抜粋)				
○「とても良い」と答えた人 0%				
○「良い」と答えた人 7% ・ボランティア先の女の子がとても良い子。 ・過去に知り合いになった中国人がだいたいいい人たちだった。				
○「ふつう」と答えた人 55% ・ニュース等で見る中国人の印象は悪いが, 自分の周りの中国人は良い人たち。よってプラスマイナスゼロ。 ・良い人も悪い人もどの国にもいると思うから。 ・特に中国人と関わったこともないし, インターネットやテレビの情報だけで印象を決めようとは思わないから。				
○「悪い」と答えた人 32% ・良いところもあるけど悪いところが目立つ。色々なものをパクるとか。 ・道徳心が欠けた行動が多く, 理解が出来ない。メディアの力に左右されているとは思うけれど。 ・マナー悪くなって思うと中国人だから。 ・良いニュースを聞かない。悪い報道ばかりだから。				
○「とても悪い」と答えた人 7% ・某テーマパークで浮き輪を盗られたから。 ・日本の国旗を燃やすから。				
Q2 中国人と直接会話をしたり, 交流をしたりすることはありますか。(選択肢: たくさんある, たまにある, ほとんどない, まったくない)				
【結果】(Q1の回答別)				
選択肢\Q1の回答	とても良い	良い	悪い	とても悪い
たくさんある	0%	5%	0%	0%
たまにある	60%	25%	12%	60%
あまりない	40%	24%	21%	40%
ほとんどない	0%	46%	67%	0%

表3 実践における「中国人理解に関するアンケート」結果 (2013年9月26日実施, 筆者の調査による)

中国人理解に関するアンケート (対象: 20代から50代男女 回答数: 75)														
Q1 あなたの中国人に対する印象を教えてください。(選択肢: とても良い, 良い, ふつう, 悪い, とても悪い)														
【結果・理由】														
○とても良い 10% ・いい人もいるけど, 悪い人もいるから分からないけど, 好き。														
○良い 20% ・よく悪いニュースが「中国」という国名で出されているけど, 私の知っている中国人で悪いような人はいないから。 ・優しい人も楽しい人もいっぱいいるけれど, やっぱり人によっては良くない人もいる。														
○ふつう 30% ・よくニュースでひどい事件とか耳にする。強そう。バイト先の中国人とても優しい。 ・あまり関わりがないので分からないが, テレビとかで見る限り, あまり良い印象ではない。														
○悪い 25% ・国同士の関係が悪い。マナーが悪いイメージ。がめついイメージ。 ・食品の加工やキャラクターなどの偽造とか悪いところしか知らないから。														
○とても悪い 15% ・テレビとかでデモをすぐくするし, 日本に対してひどいから。 ・母が中国人の印象がとても悪いので影響されているのが大きい。														
Q3 中国人と直接会話をしたり交流したりすることはありますか。(Q1の回答別: 縦軸, 選択肢: 横軸)		Q6 あなたが感じる中国という国の印象を教えてください。												
【結果】		【結果】												
		<table border="1"> <tr> <td>とても良い</td> <td>5%</td> </tr> <tr> <td>良い</td> <td>5%</td> </tr> <tr> <td>ふつう</td> <td>45%</td> </tr> <tr> <td>悪い</td> <td>35%</td> </tr> <tr> <td>とても悪い</td> <td>10%</td> </tr> </table>			とても良い	5%	良い	5%	ふつう	45%	悪い	35%	とても悪い	10%
とても良い	5%													
良い	5%													
ふつう	45%													
悪い	35%													
とても悪い	10%													

(2) 第 1 時 問題の提示

第 1 時は単元の導入にあたる位置付けである。まず、「中国人理解に関するアンケート」を行った。そして、Ⅲの 2 で述べたアンケート結果をワークシートに沿って説明し、アンケート結果から問題を見つけさせた。

アンケートの説明は、ワークシートに沿い、まず、中国人に対する印象のグラフに注目させ、印象が全体的に「ふつう」よりも「悪い」傾向にあるということを確認した。

次に、各回答別の理由を、それぞれの中国人と関わる機会の割合とともに説明した。この時、印象が「とても悪い」と答えた理由の 1 つである「某テーマパークで浮き輪を盗られたから」に対し、1 人の生徒が「それ、中国人だとは分からないじゃん」と発言した。この時点で、日本人の中には中国人に対して偏見を持つ人がいるということに気づく生徒もいたと考えられる。一通り説明が終わったところで、ワークシートにアンケート結果から感じたことや疑問に思ったことを書かせた。しかし、当初予定していた 50 分授業ではなく、学校の都合で 45 分授業となったので、時間を確保できず、空欄の生徒がほとんどになってしまった。

そして、改めて中国人に対する印象が「良い」と「ふつう」の人の理由と中国人に対する印象が「悪い」人の理由を取り上げ、比較させた。ここから、「良い」と「ふつう」の人の理由の「ボランティア先」「知り合い」「自分の周り」「僕の友達」といった部分に注目させ、気づくことを考えさせた。生徒は「関わっている」「会話したことがある」と発言した。これらをもとに、「良い」と「ふつう」の人は、身近に中国人がいると筆者が結論づけた。中国人に対する印象が「悪い」人の理由は、全体に注目させ、気づくことを考えさせた。生徒は「テレビで見てる」「価値観が違う」などの意見が出た。これらから、「悪い」人は、イメージや報道・メディアをもとに判断していると結論づけた。

さらに、中国人に対する印象が「ふつう」の人と「悪い」人の中国人と関わる機会を比較させた。それぞれの中国人と関わる機会が「あまりない」「ほとんどない」と答えた人の割合に注目させた。「悪い」人の中国人と関わる機会が「あまりない」「ほとんどない」と答えた人の割合が、87%にも及ぶことを強調した。

最後に、これらを根拠とし、「多くの日本人は中国人に対して良い印象を持っておらず、偏見を持っているのではないか」という問題提示を行った。そして、次の討論につなげた。

(3) 第 2 時 問題への理解

第 2 時は、前時の「多くの日本人は中国人に対して良い印象を持っておらず、偏見を持っているのではないか」という問題についてのグループ討論を中心に進めた。

グループ討論を進める前に、対象生徒に行ったアンケート結果をもとに「どうして中国人に対する印象が良くない人が多く、『偏見』を持ってしまう人がいるのだろう」と発問した。その際、印象が「悪い」「とても悪い」と答えた生徒に対する配慮として、「人間誰しも偏見を持ってしまうことはある」ということを全員の生徒に伝え、理解させた。次に、グループで問題について話し合わせた。生徒は「尖閣」「反日デモ」などの日中関係や「一党独裁」「黄砂」などの中国国内の問題、日本で見かける中国人の印象などを中心に話を進めていた。難しい問題かと思ったが、生徒の議論は活発となり、様々な視点から問題を見ることができていた。また、多くの生徒が積極的に考え、意見を出していたので、この活動の成果は大いにあったと考える。

そして、グループの代表者にグループの意見のまとめを発表させた。出てきた意見としては、「日本で中国の悪い報道ばかりされている」「報道の仕方が悪いから、中国という国のイメージで中国人の印象を判断してしまう」などがあつた。また、この授業の最後に、ワークシートにこの問題に対する自分の考えのまとめと話し合いや発表を通じての感想を記入させた。

この問題に対する自分の考えのまとめとして出された意見には、「確かに中国の報道ばかりを見るとひどいと思うけれど、話を聞いてみて、日本も日本で悪い報道しかしていないのもおかしいと思った。(中国人は)いいことも絶対にしてるはずだし、なぜそういうところばかり報道しているのか疑問に思った」「やはり、国のイメージが悪すぎる。中国のことはあまり知らないけれど、ここまで聞くとどうしても良い国だとは思わない」「やっぱりメディアの力は影響力が強いから、もっと日本も他国に敬意をもって報道すべきだと思う。普通の人がたくさん目にする機会の多いメディアでも

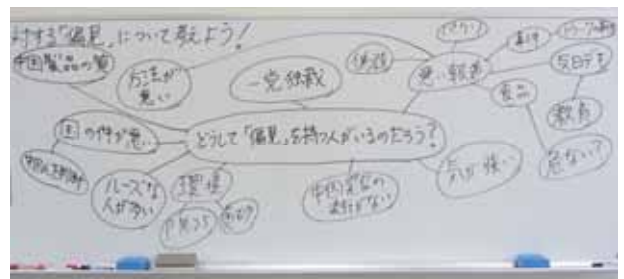


写真 1 第 2 時板書 (グループ発表のまとめ)

(筆者撮影、東京都立千早高校、2013 年 9 月 27 日)

っと中国の良いところを発信していけば偏見を持つ人も多かれ少なかれ減ると思う」などといったものが出された。中でも一番多かったのは、報道に関するもので、日本の報道に疑問を持つ生徒が多かった。これは、発表においてほとんどのグループが日本の報道について触れていたためであると考えられる。この時間の感想としては、「そもそも中国の考え方と日本の考え方が違って、日本側は中国のことを『日本のやり方ではない=悪い』みたいになっているのではないかと思った」などと書かれていた。

本時の活動を通して生徒は、日本の報道から得られる中国に関する情報を鵜呑みにすべきではないということや中国についてもっと理解すべきだということ、中国人の良い面をもっと知る必要があるということなどを一人一人が感じていることがワークシートの記述から分かる。したがって、本単元の目標である「多くの日本人が中国人に対して偏見を持っていることに問題意識を感じることができる」という点について、十分に到達できていることが分かり、本時の学習効果は非常に大きかったと考えられる。

(4) 第3時 現場への共感

第3時は、中国人をゲストティーチャーとして招き、生徒とコミュニケーション活動やインタビューを通じ交流させる授業を開発した。実際に中国人と交流させることで、多くの日本人が中国人に対して偏見を持っている問題に対して理解を深めると共に、生徒自身の中国人に対する偏見を解消させるねらいがあった。しかし、数多くの協力者の方々の尽力が実らず、中国人の方を招くことができなかった。そのため、担当の先生による資料提供などの協力の下、直前に授業内容の変更をした。新しい授業計画を表4に示した。

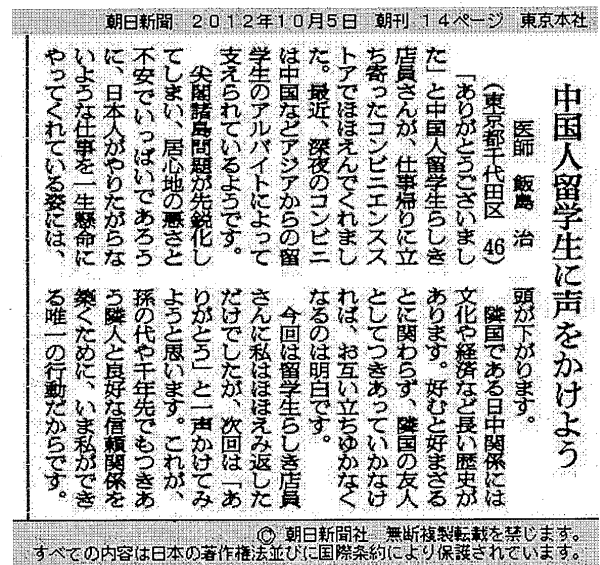
中国の基本知識に関するクイズは、中国の地理的知識や慣習の定着を図るために行った。前時で、中国についてもっと知る必要があると感じていた生徒が多かったことから、結果的に生徒の興味・関心も高くなり、楽しく知識の定着を図ることができた。また、クイズの他に、ワークシートに中国の地図を載せ、中国の主

要都市である北京、広州、上海、重慶、西安の5つの都市に色をつけさせる作業を取り入れた。

「反日デモに関するビデオ」は、テレビ東京のMプラス11という番組内の特集「反日デモから1年芽生え始めた変化」(2013年9月20日放送)¹⁴⁾を視聴させた。このビデオは、2012年に中国の100都市以上でおこった反日デモから1年経ち、見えてきた中国社会の変化を伝えるために、反日デモに直面した中国の人々が今何を思うのか取材したものである。このビデオを視聴させることで、中国人に対する偏見解消に向け、中国人が日本に対して何を思っているのかということや中国人の考え方などを理解させるねらいがあった。

「中国人理解に関する新聞記事の紹介」では、朝日新聞に掲載された一般の日本人や中国人が日中問題について意見を述べた記事を5件提示した。そして新聞記事を読み聞かせの形で生徒と共に見ていった。それらの新聞記事の1つを資料1に示す。

多くの生徒は、ビデオを視聴した後ということもあり、とても興味を持って新聞記事が語る現実を理解しようとしていた。



資料1 中国人理解に関する記事
(朝日新聞 2012年10月5日朝刊 14ページ 東京本社より)

表4 変更した第3時指導計画

時数	主な学習活動	評価	指導上の留意点
3	<p>中国を知る・現場への共感</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 中国の基本知識に関するクイズ ○ 反日デモに関するビデオ視聴 ○ 中国人理解に関する新聞記事の紹介 	<p>知 思</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・人口や国土、民族など地理的基礎知識や慣習の理解を図る。 ・2012年に起きた反日デモに対する中国人の思いを理解させる。 ・日本に興味のある学生のインタビューを視聴させることで、中国人理解を図る。 ・日本人や中国人の相互理解について書かれた新聞記事を5つ紹介することで、生徒自身の偏見解消を図る。また、それらの記事から、新たに問題点を見つけさせる。

また、日本人から見る中国人の姿と日本在住の中国人の気持ちなどを理解することができるこれらの記事から、ビデオ同様に中国人に対する偏見解消を図るねらいがあった。

本来は、実際に中国人と交流させ、中国人理解をさせたかったが、ビデオと新聞記事で間接的に中国人理解をする形となってしまった。しかし、できる限り中国人の考えや気持ち、実際の中国人の姿が分かるような教材を準備できたと考えている。

この授業を終えた生徒の感想は、「中国人全員が日本を嫌がっているのではないのが改めて分かった。今まで反日デモをしている人は全員、日本のことが嫌だから活動しているのだと思い込んでいたけれど、『一生に一度はデモに参加してみたい』という興味本位で参加している人もいることが分かって驚いた。日本人の中国人に対する偏見などをなくしていかないと仲良くしたいと思ってきている中国人に失礼だと思いました。日中関係を良くしていくには、両国とも努力して悪いところをなくすべきだと思った。」「この授業で中国を考えはじめてから、初めて中国が日本をどう思っているのか聞いた。とても感動した。いままでの授業で中国の悪いイメージばかり挙げてきたが、それが本当にばかばかしい事だと思った。(中略) 国同士の仲が悪くても結果付き合うのは人間同士なのだから、理解を深めたい。」などと書かれていた。

これらの感想や他の生徒の感想から、生徒は今まで実際に見たり聞いたりすることのできなかった中国人の姿や考えに触れ、今までの中国人に対する考え方が大きく変化したということが読み取れた。したがって、ほとんどの生徒の中国人に関する偏見は解消され、多くの日本人が持つ中国人に対する偏見を解消したいという考えを持つようになってきたと言える。実際に中国人をゲストティーチャーとして招けない場合でも、中国人理解は可能であり、中国人に対する偏見を解消させることができた。

(5) 第4時 ディベート準備

第4時は第5時に行うディベートの準備を行った。ディベートを行った理由としては、ディベートの根拠を調べさせることで、中国の地誌などを学習させるねらいがあった。また、「批判的に考える力」や「コミュニケーションを行う力」を養わせたい。

まず、ディベートの定義や進め方についてスライドを使用して説明した。その際、「根拠」を明確にし、立論することを強調した。根拠は、「自分のイメージや噂などで判断したものではなく、しっかりとした資料や

データなどをもとに判断した具体的なもの」と説明した。

次に、テーマを説明し、4つのグループを肯定側と否定側それぞれ2つずつに分けた。テーマは、「中国人と友好的な関係を築いて『いくべき』か『いかなくても良い』か」である。ディベートを通し、中国と日本が友好関係を築くことが、両国の持続可能な発展につながるということを理解させたいからである。

しかし、前時までのワークシートの記述から分かるように、本クラスは肯定側の意見を持つ生徒がほとんどである。そこで、生徒にはあえて否定側を設定することで、見えてこない問題が見え、この問題の理解が一層深まるといったことを説明した。また、この状況で否定側を置くことで、「批判的に考える力」を養わせるねらいがあった。

そして、各グループで次時に行わせるディベートにおいて「根拠」となる資料やデータなどを文献やインターネットなどで調べさせた。文献は主に筆者が準備した。その際、「地理的視点(貿易・観光・人口など)」「歴史的視点」「文化的視点」といった具体的な視点を与えた。

以上の他にも、机間指導を行い、アドバイスなどの支援を行った。

反省点としては、調べる意欲のある生徒と意欲のない生徒の差がはっきりと出てしまい、グループの一部の生徒に負担が集中してしまうグループも見られた。グループ内で役割分担を明確にさせる必要があったと考える。また、このようになってしまった要因として、ディベートのテーマが非常に大まかなものになってしまったことが挙げられる。何を根拠に立論すべきなのか分からないといった生徒が多く見られたので、もう少し絞ったテーマを提示すべきであった。さらに、準備時間が1時間という短い時間しか取れなかったため、授業時間内では十分な準備ができなかったことが反省すべき点であった。生徒には家庭学習を指示した。

(6) 第5時 ディベート

第5時はディベートを行った。生徒は短い準備時間だったにも関わらず、しっかりとした根拠にもとづき、立論することができていた。

全体的に資料やデータを根拠に立論できており、その点では評価できるディベートとなった。しかし、「環境問題に目を向けない国とつきあう必要はない」「経済ばかりに目を向けている中国とはつきあう必要がない」といった論理的に飛躍した立論もなされており、このような甘いところが立論の未熟さであり、外国の

人と共通理解が得られない一因になっているのではないかと考えられる。したがって、課題が多く残った活動であったと言える。

その原因としては、やはりテーマが非常に大まかなものになってしまったことが第一に挙げられる。また、準備時間の確保ができなかったため、机間指導などで、論理的に飛躍した立論について指摘する時間も少なかった。準備時間を増やし、立論の立て方などを丁寧に指導していく必要があった。

授業後の生徒の感想は、「友好関係を築いたとしてもメリット・デメリットそれぞれあるし、どちらにしても日本に大きな影響を与える。友好関係を築いた場合、日本が潤うなどお互い良いことがある。しかし、領土を取られたり、嫌なことを押しつけてきたりするかもしれない。築かなかった場合、中国産の物がなくなり、物がなくなってしまうかもしれない」「日本人は輸入している貿易相手の1位が中国で、私たちを手助けしてくれている国なので、この関係は無理に深めず、このままでいいと思った。難しい課題であったけれど、相手の意見も素直に受け止めることができ良かった」などが出た。これらから、多くの生徒が、日中の友好関係の問題について関心や理解が深まったと考えられる。

しかし、このディベートを終えて、「日本人と中国人はこれから友好関係を築いて行くべきだと思いますか」と改めて問い直したところ、「どちらにしるメリット・デメリットが出る」「どちらの意見も正しいので、どちらを取るべきか判断できない」などの理由で、「分からない」と答える生徒が半分程度いたことも事実である。この点は課題とも言えるが、教師が無理に「友好関係を築くべき」という方向に導くのは社会科の目標に反する。したがって、マイナスの面を知った上でこの単元の問題について考えることで、思考がより深まることを期待した。

(7) 第6時 問題の捉え方と問題に対する解決策の表現

第6時は、始めに前時のディベートのまとめとして、肯定側の立論などを根拠（特に日中の経済面での相互依存）として、「日本と中国が持続可能な発展を遂げるために」という視点に目を向けさせ、日本と中国の友好関係構築の必要性を確認した。

次に、今までの授業を簡単に振り返り、「どうして中国人に対する偏見を解消したり、中国人と友好関係を築いたりする必要があるのか」という疑問を生徒に投げかけた。考えさせた後、こちらから、「日本と中国が持続可能な発展を遂げるため」とまとめた。そして、

「日本人と中国人が友好関係を築いていくために私たちにできることはないか？」と切り出し、「私たちが日本人と中国人の友好の架け橋となろう！」というテーマで具体的なプロジェクトを考えさせる活動に移った。プロジェクト提案を行う際の注意点として、今までの学習を踏まえること、実際に行動に移すことのできるプロジェクトを考えることの2点を説明した。また、プロジェクトの目的も明確にするように促した。

残りの時間はグループで次時のプロジェクト提案に備え、話し合いや準備のための時間に充てた。

しかし、各グループともなかなか話し合いが円滑に進まず、筆者がアドバイスなどを積極的に行った。生徒は、世間に伝えたいことはあるものの、どのようにしたら伝えられるかという部分でつまづいていた。やはり、高校生にとってプロジェクトを短い時間で考えるのは容易ではなく、もっと多くの準備時間を確保すべきであると感じた。

(8) 第7時 プロジェクト提案

本時は、本単元の集大成である、プロジェクト提案を行った。準備時間が少ない中、各グループはそれぞれの個性を発揮したプロジェクトを考えることができ、とても充実した発表となった。

各グループのプロジェクトは、「今の私たちの声を届けたい！メディアへ行こう！」「中国人と仲良くするために共通して楽しめるもので交流しようー」「お互いの偏見をなくすために料理教室を開く」「中国に住む同じ年の子と友達になるーBig Family Programー」の4つが出された。各プロジェクトの内容は以下にまとめた。

○「今の私たちの声を届けたい！メディアへ行こう！」

この授業で中国は良いところだと知った。また、この授業でメディアが中国の印象を左右していると感じた。そこで、多くの人に中国の良さを知ってもらうために、メディアの人たちに中国の真の姿や今の高校生の気持ちを伝えて、テレビや新聞で報道してもらえるように努めるプロジェクト。

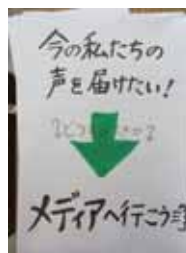


写真2 プロジェクト①-1 写真3 プロジェクト①-2

(ともに筆者撮影、東京都立千早高校にて、2013年10月10日)

○「中国人と仲良くするために

ー共通して楽しめるもので交流しようー

中国人と仲良くするために具体的に何をすべきか考えた。お互い、人間なので共通して楽しめるものがあるはず。例えば、アニメ、漫画、ダンス、スポーツ、料理など。アニメは、日本で初めての長編アニメは中国を舞台にしたものであった。また、人気漫画の一節に、過去の記憶や歴史にとらわれ、自分は何もされていないのにも関わらず、人間に対し恨みを持ち続ける、環境の化け物が登場するところがあり、今の日本人と中国人と同じではないか。

このようなアニメや漫画などを通して交流し、お互いに理解を深め友好関係構築を目指すプロジェクト。

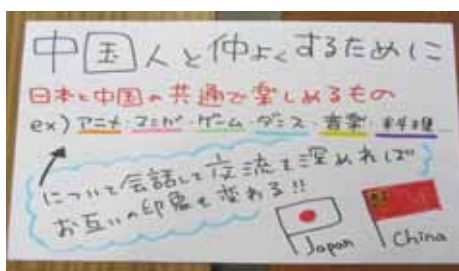


写真 4 プロジェクト②

(筆者撮影, 東京都立千早高校にて, 2013年10月10日)

○「お互いの偏見をなくすためにお料理教室を開く」

日本人と中国人が交流できるイベントを考えた。そのイベントとはお料理教室である。お料理教室のメリットは、お互いの国の食文化を知ることができること、食事を囲んで同じテーブルで食べることで会話がすることが挙げられる。このイベントを広めるために、サイトやチラシ、ポスター、SNSを使う。まずは小さなところから始め、規模を徐々に大きくしていきたい。最終的に多くの人が中国人と仲良くなることを目指すプロジェクト。

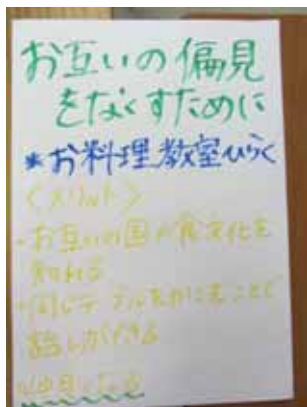


写真 5 プロジェクト③

(筆者撮影, 東京都立千早高校にて, 2013年10月10日)

○「中国に住む同い年の子と友達になる

ーBig Family Programー

いままで授業で学んできたことなどを同い年の中国人に伝え、お互いに理解を深め、さらにその輪を広げることで良い関係が築けるのではないかと。しかし、実際に中国や中華街に行くことは難しい。そこで、まずは、千早高校にいる中国人の生徒と仲良くなり、その親ともつながっていく。また、日本人にも中国人の良さをたくさん知って欲しいので、SNSを利用して様々な人に拡散していきたい。この流れを「Big Family Program」と名付け、日本人と中国人が仲良くなり、明るい未来を目指すプロジェクト。



写真 3-6 プロジェクト④

(筆者撮影, 東京都立千早高校にて, 2013年10月10日)

発表は、各グループとも資料を用意したり、演技を入れたりするなど、聞いている側に伝わりやすい工夫が為されていた。これは、ディベートの時間に何人かの生徒が、人に自分の考えを伝えることが難しいと言っており、その課題を克服しようと努めた結果だと考える。この発表から、この授業を通して、生徒の「コミュニケーションを行う力」は向上したのではないかと考察する。

また、プロジェクトの内容もとてもおもしろいものばかりであり、現実に実現可能なプロジェクトである。また、授業内容を踏まえて考えられたプロジェクトが多く、生徒は短い時間ながらもしっかりと思考・判断し、日本人と中国人の架け橋となれるプロジェクトを考えることができたと言える。

課題としては、やはり準備時間が少なく、「こんな短い時間では難しい」などの声が多く聞かれたことである。より充実したプロジェクト提案を行うために準備の時間を1~2時間追加すべきであった。

IV 考察

1. 実践後調査の分析

(1) 授業後のアンケートの分析

合計7時間の授業終了後、本実践が生徒に与えた影響を分析するため、簡単なアンケートを行った。その結果を表5に示した。

本アンケートは、授業時間内にできなかったこともあり、未提出者が多い。したがって、正確な分析はできない可能性もあるが、提出された14人の生徒のアンケートをもとに分析を行っていく。

まず、Q1は、授業を受けて中国人の印象がどのように変化したかを調べるための質問である。授業前の調査では、「とても良い」と答えた生徒が10%、「良い」が20%、「ふつう」が30%、「悪い」が25%、「とても悪い」が15%であった。これらの結果と今回の結果を比べると、「とても良い」「良い」「ふつう」のいずれかに回答が集中し、提出者の全員が中国人に対して良くない印象をあまり持たなくなると言える。

生徒の変化の様子は、事前アンケートに比べ中国人の印象が良くなった生徒は7人、変わらなかった生徒は5人、印象が悪くなった生徒は1人であった（無記

名1人）。印象が悪くなった生徒については、「とても良い」から「良い」に変化したものであり、中国人の印象が極端に悪くなったとは言い難い。したがって、全体の半分くらいの生徒がこの授業をきっかけに中国人の印象が良くなったと言え、一定の成果はあったと考える。

次に、Q2は、授業を受けて「中国」という国の印象がどのように変化したかを調べるための質問である。授業前の調査では、「とても良い」と答えた生徒が5%、「良い」が5%、「ふつう」が45%、「悪い」が35%、「とても悪い」が10%であった。これらの結果と今回の結果を比べると、「悪い」「とても悪い」と答える人の割合が極端に減り、「ふつう」と答える人の割合が増えた。理由に注目すると、この授業で中国の良い面と悪い面を両方知ったために、どちらとも判断できないため「ふつう」と回答した生徒が大半であり、これが今回の結果の要因だと考えられる。

生徒の変化の様子は、事前アンケートに比べ「中国」の印象が良くなった生徒は6人、変わらなかった生徒は7人、印象が悪くなった生徒は0人であった。印象が良くなった割合は高いものの、印象が「良い」と答えるようになった生徒はわずかであり、中国人に対す

表5 授業後のアンケート結果（2013年12月実施，筆者の調査による）

中国人理解に関する授業後アンケート（対象：実践クラスの生徒（20人） 回答：14人）																					
<p>Q1 あなたの中国人に対する印象を教えてください。（選択肢：とても良い，良い，ふつう，悪い，とても悪い）</p> <p>【結果・理由】（一部抜粋）</p> <p>○「とても良い」と答えた人 7% （授業前：10%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三国志が好きだから <p>○「良い」と答えた人 43% （授業前：20%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・DVDを見たり，ネットで中国人のエピソードを読んだりしていたら，本当に中国人の中でも日本のことを良く思っている人たちがいるのだと改めて分かった。嬉しかった。 ・反日デモを本心からやっている訳じゃない人もいると知ったから。しかし，尖閣諸島の件は中国が悪いのだと思った。 ・日本人もかもしれないけれど，いい人もいれば悪い人もいるし，でも日本を好きでいてくれる人がいるのは嬉しい。 <p>○「ふつう」と答えた人 50% （授業前：30%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初，この授業をやった時は「悪い」だったけれど，色々な意見を聞くなどしているうちに中国はそんなに悪い国ではないことを知り，「好き」ではないけれど，気持ちは変わった。 <p>○「悪い」と答えた人 0% （授業前：25%）</p> <p>○「とても悪い」と答えた人 0% （授業前：15%）</p>																					
<p>Q2 この授業を受けた後の中国という国の印象を教えてください。</p> <p>【結果】</p> <table border="1"> <caption>Q2の結果</caption> <thead> <tr> <th>印象</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>とても良い</td> <td>7%</td> </tr> <tr> <td>良い</td> <td>7%</td> </tr> <tr> <td>ふつう</td> <td>79%</td> </tr> <tr> <td>悪い</td> <td>7%</td> </tr> <tr> <td>とても悪い</td> <td>0%</td> </tr> </tbody> </table>	印象	割合	とても良い	7%	良い	7%	ふつう	79%	悪い	7%	とても悪い	0%	<p>Q4 実際に日本人と中国人との友好の架け橋となるために，これから何か取り組んでいこうと思いますか？</p> <p>【結果】</p> <table border="1"> <caption>Q4の結果</caption> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>取り組みたいと思う</td> <td>72%</td> </tr> <tr> <td>分からない</td> <td>28%</td> </tr> <tr> <td>あまり取り組みたいと思わない</td> <td>0%</td> </tr> </tbody> </table>	回答	割合	取り組みたいと思う	72%	分からない	28%	あまり取り組みたいと思わない	0%
印象	割合																				
とても良い	7%																				
良い	7%																				
ふつう	79%																				
悪い	7%																				
とても悪い	0%																				
回答	割合																				
取り組みたいと思う	72%																				
分からない	28%																				
あまり取り組みたいと思わない	0%																				

る印象とは反する結果が見られた。やはり、中国の政治や環境問題などに対する不信感が残っているようである。

Q4 は、本研究の目的である「行動の変革」を明らかにするためのものである。本実践で学んだことをもとに、日本人と中国人との友好の架け橋となるために何か取り組んでいこうとする意志のある生徒が70%以上いることから、本実践は一定の成果をあげたと言える。しかし、行動の変革というところまではこの段階では至っておらず、後日調査を実施した。その結果については本節の第2項で述べる。

具体的な内容は、多くの生徒が自分たちで考えたプロジェクトを実践したいと答えた。この結果を受け、もっと多くの準備時間を確保し、実際に実践する場を提供することができると、生徒にとってよりよい授業になったのではないかと感じている。また、「中国人との輪を広げたい」と答えた生徒が多いことから、生徒は中国人と交流し、本当の中国人の気持ちや人柄を知りたいと思っていることが分かった。

(2) 事後調査の分析

本実践の目的である、ESD 授業が行われた後、生徒の「行動の変革」がなされたかどうかを明らかにするため、約2か月後の2013年12月初旬に事後調査を行った。

結果は、提出者12人の内、「取り組んだ or 取り組んでいる」と答えた生徒は3人、「取り組んでいない」と答えた生徒は9人であった。

「取り組んだ or 取り組んでいる」と答えた生徒が具体的に行動した内容は、「ハロマイ¹⁵⁾で取り組もうとしている」「知り合いに中国人の良さを話した」「知り合いに中国人の偏見をなくすよう働いた」と答えた生徒が1人、「知り合いに中国人の良さを話した」が1人、「知り合いに中国人の偏見をなくすよう働いた」が1人である。ささいなことだが、この授業がきっかけで、様々な働きかけを行う生徒が出てきたことで、「行動の変革」という目標を一部の生徒は達成できたと言える。なお、「ハロマイで取り組もうとしている」と答えた、継続的にプロジェクトに取り組んでいる生徒の詳細については次項で詳しく述べる。「取り組んでいない」と答えた生徒の今の考えは、「取り組みたいと思うが、行動に移すことができないと思う」が4人、「これから何か取り組みたいと思う」が3人、「おそらく何も取り組めない」が1人、「その他：気分で作る気になったらやるけれど、今は他のことをやる」が1人であっ

た。このうち、前向きな回答が得られたのは、「これから何か取り組みたいと思う」と答えた3人であり、行動の変革が期待できる。他の生徒も取り組みたいという意志はあり、何かのきっかけを掴んで行動して欲しいと願う。

以上より、行動の変革をした生徒、行動の変革が期待できる生徒は提出者の半分であり、本実践の目的はある程度達成したが、全員の行動を変革するには至ることができなかったと結論づける。

(3) 特定生徒の変化

事後調査において、「ハロマイで取り組もうとしている」と答えた生徒(以下生徒Aとする)について、どのように取り組んでいるのかを調査した。「ハロマイ」とは、コミュニティデザインの授業のまよめの段階として位置付けられ、生徒一人一人がよりよい社会を実現するために、社会が抱える課題を解決するためのプロジェクトを考え、実践に移す授業のことである。

生徒Aは、授業前のアンケートで、中国人に対する印象を「悪い」、中国という国の印象を「とても悪い」と回答していた。しかし、中国人と交流する機会はまったくなく、それらの印象を持つ理由も「マナーが悪いイメージ、がめついイメージ」と回答していた。

しかし、授業が進んでいくにつれ、感想に変化が見られた。第2時終了後の感想では、「自分もそうだけれど、やはり中国はお隣の国だから、もっと身近な存在だと意識した方が良かった」と、第3時終了後の感想では、「本当に日中関係の悪化は両国にとって悪いことしかないから、早く仲良しになれるよう、お互いに気遣ってあげたいと思った」ということを書くようになった。

そして、授業後のアンケートでは、中国人に対する印象が「良い」に、中国という国の印象が「ふつう」に変化した。そして最後のコメントとして「この授業全体を通して私は自分自身の視野が広がった。この授業を受けたことによって物の見方がとても変わったし、お互いをきちんと知る事の大切さを知りました。」と書き残していた。

その後「ハロマイ」において、生徒Aは、「いろいろな文化を持つ国々の人たちと楽しくパーティーをする」というテーマで、外国人の偏見を解消しようとするプロジェクトを計画中である(詳細は図2)。

この授業を受けたことで、考え方が大きく変わり、このような継続的なプロジェクトを提案し、実現していくことが「行動の変革」であり、本実践を行い、こ

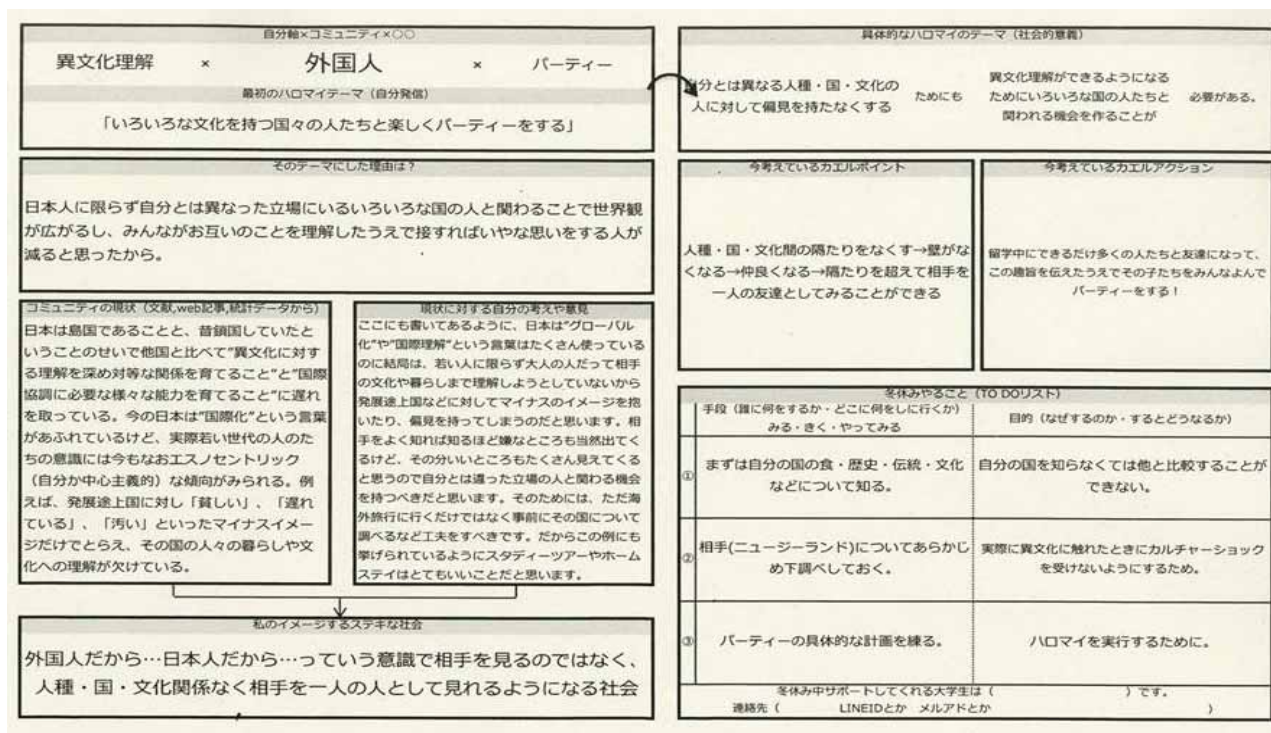


図2 継続中のプロジェクトの概要 (学生団体「ちみらぼ」提供)

のような生徒が出たことは大きな成果である。

2. 授業実践の成果と課題

(1) 実践で得られた成果

本実践で得られた成果として、まず、日本の報道から得られる中国に関する情報を鵜呑みにすべきではないということや中国についてもっと理解すべきだということなどを生徒一人一人が感じる事ができた点が挙げられる。このことを第3時までに感じさせたことで、生徒は本単元に興味を持つことができ、ディベートやプロジェクト提案に意欲的に取り組むこともできたと考えられる。

そして、本単元の目的である、「生徒の行動の変革を促す」ことができたことが最も大きな成果である。全員の生徒の行動を変革させることはできなかったが、実際にプロジェクトに継続して取り組む生徒や周りに働きかけた生徒、行動を変革しようとする意志がある生徒が約半数出てきたことは、過去の先行研究や実践等であまり見かけない結果である。その点においても本実践は価値のあるものと言えるだろう。

次に、感想やアンケート、事後調査などから分かるように、ほとんどの生徒の中国人や中国に対する見方や思考が実践前と比べ大きく変化した点が挙げられる。生徒はこの授業で、中国人に対する視点が大きく変化したと同時に、報道やイメージに流されるのではなく、

実際に相手の気持ちや本当の姿を理解することの大切さに気づいた。したがって、生徒が中国人に限らず、外国人に対する偏見解消や外国人との友好関係構築について考える際にも、今までとは異なった見方ができるようになったと期待できる。これは、本研究のテーマである「人権や文化の多様性と異文化理解」において、非常に重要な視点であり、この視点を養うことができたことは、とても大きな成果である。

(2) 実践で生じた課題

本実践で生じた課題は、主に2点ある。

1点目は、授業時数を十分に確保することができなかった点が挙げられる。第3時までは、時間的にも余裕があり、生徒は関心を持って意欲的に取り組むことができていた。しかし、ディベートやプロジェクト提案は、短い時間でとても内容の濃い活動をしたので、生徒の意欲が多少低くなってしまったように感じた。また、多くの生徒がコメントや感想等で、準備時間の少なさを指摘しており、この点を改善していかなければならない。したがって、ディベートやプロジェクト提案を行う前の準備時間をさらに1~2時間確保することが必要であると考えられる。

2点目は、地理的な知識の定着を十分に図ることができなかった点が挙げられる。本実践は、与えられたテーマについてグループで話し合う活動が中心であった。したがって、中国の地誌や異文化理解に関する学習を十分に行うことができたとは言えない。今後は、

このような形で学習を進める際に、いかに生徒に知識を定着させることができるかということについて考え、工夫した授業を展開していきたい。

以上述べた 2 点を今後の課題とし、これからの ESD 授業開発や日々の授業設計などに生かしていく。

3. ESD 授業の有用性

本研究の目的は、「高等学校地理 A において、人権や文化の多様性と異文化理解の視点からアプローチする ESD 授業の開発・実践を行い、学習者が自らの行動を変革するまでに至る過程を調査し、ESD の有用性を考察すること」であった。

本実践の成果などから分かるように、この授業を受けたことにより、生徒の中には社会に対する見方や考え方が実践前と比べ大きく変化したり、実際に行動を起こしたりした者がいた。これは、ESD が目指すものであり、実際にこれからの社会を生き抜く高校生にとって必要な力である。

また、社会の問題を身近なものとして捉え、その問題を解決するための行動を促すことを目指す ESD は、生徒や社会にとって、とても重要なものである。特に、本実践で取り扱った「人権や文化の多様性と異文化理解」の視点からアプローチする ESD 授業は、国際社会の強固な連携が求められる現代において、欠かすことのできない授業であり、このような実践を積極的に行うことで、持続可能な社会の実現に着実に近づくのではないかと感じた。

したがって、本実践全体を通して、ESD 授業の有用性は非常に高いものであり、様々な場で ESD が実践され、普及していくことが未来の社会にとって大切であると結論づける。

V おわりに

以上、本稿では、高等学校地理 A において、人権や文化の多様性と異文化理解の視点からアプローチする ESD 授業の開発・実践、学習者が自らの行動を変革するまでに至る過程を調査し、ESD の有用性を考察してきた。

方法として、「日本人と中国人との友好の架け橋となろう」という日本人の中国人に関する偏見を解消し、日本人と中国人の友好の糸口を見い出せるような ESD 単元の開発をした。そして、実際に東京都立千早高等学校で授業実践やアンケート調査を行った。

その結果、多くの生徒の中国人に対する偏見は無く

なり、どのようにしたら日本人と中国人は友好に向けて歩み寄ることができるのかということを実践に考え、議論する態度を養うことができた。また、「日本と中国が持続可能な発展を遂げるため、私たちにできることはないか」というテーマの下、グループでプロジェクト提案を行い、そのプロジェクトを実際に実現させたという生徒が大半であった。以上のことから、人権や文化の多様性と異文化理解の視点からアプローチする ESD 授業の有用性は非常に高いものであり、多くの実践を行っていくべきだと言える。

しかし、本実践校は英語教育などに力を入れており、生徒たちの国際理解に対する関心は、他の学校に比べ高いと言える。したがって、他の高等学校で同様の実践を行う際には、さらに様々な工夫が必要になってくることが予想され、その点が今後の課題である。

そして、日本や中国を初めとする世界の国々が持続可能な発展を遂げるために、私たち一人一人にできることはないのかという問いを投げかけてくれる ESD の普及と発展に向けて、地理の授業だけでなく、学校教育全体を通して取り組んで行く必要があると考える。

本稿は筆者が愛知教育大学在学中に執筆した卒業論文を要約・加筆修正したものです。本研究を進めるにあたり、ESD 授業開発・実践において、東京都立千早高等学校親泊寛昌先生をはじめとする諸先生方及び、岩阪英将さんをはじめとする学生団体「ちみらぼ」の皆様、東京大学大学院新領域創成科学研究科浜泰一さんには大変なご支援とご指導を賜りました。また、愛知教育大学地理学教室の近藤裕幸先生をはじめとする諸先生方に終始ご指導を賜りました。以上、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 日本ユネスコ国内委員会 (2012) : 『ユネスコスクールと持続発展教育 (ESD)』日本ユネスコ国内委員会事務局, p.1.
- 2) 「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」関係省庁連絡会議 (2011) : 「我が国における『国連持続可能な開発のための教育の 10 年』実施計画」, p.4.
<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kokuren/keikaku.pdf>
(最終閲覧日 2013 年 12 月 17 日).
- 3) 前掲 2) p.11.
- 4) UNESCO 作成, 松井上席研究員訳 (2004) : 『仮訳 (未定稿) 国連持続可能な開発のための教育 10 年 2005-2014 国際実施計画案』, http://www.esd-j.org/j/documents/DESD_J_Draft2.pdf (最終閲覧日 : 2013 年 12 月 17 日).
- 5) 伊藤裕康・北堀宏・三野健 (2012) : 「学部教員と附属学校園教員との C・T 授業による ESD 授業の開発 (1)」『香川大学

- 教育実践総合研究』24, pp.119-131.
- 6) 永田成文(2011):「多文化共生を考える小学校社会科における異文化理解学習—ESDの視点を導入して—」中山修一・和田文雄・湯浅清治編:『持続可能な社会と地理教育実践』古今書院, pp.71-79.
- 7) 前掲6)
- 8) 米田伸次(2010):「国際理解教育の未来に向けて」日本国際理解教育学会編:『グローバル時代の国際理解教育-実践と理論をつなぐ-』明石書店, pp.236-237.
- 9) 文部科学省 web ページ「持続可能な開発のための教育(ESD)とは?」.
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/jizoku/kyouiku.htm
 (最終閲覧日 2013年12月25日)より.
- 10) 永田佳之(2010):「持続可能な開発のための教育(ESD)と国際理解教育」日本国際理解教育学会編:『グローバル時代の国際理解教育—実践と理論をつなぐ—』明石書店, p.218.
- 11) 総務省統計局「都道府県別在留資格(在留目的)別在留外国人(その1)中国」.
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001111233>
 (最終閲覧日:2013年12月18日)より.
- 12) 東京都の統計「外国人の人口 平成25年1月第2表国籍別外国人人口」.
<http://www.toukei.metro.tokyo.jp/gaikoku/2013/ga13010000.htm>
 (最終閲覧日:2013年12月18日)より.
- 13) アンケート期間は2013年9月16日から9月23日. 方法はwebアンケート(<http://enq-maker.com>)とアンケート用紙の配布により実施.
- 14) http://www.tv-tokyo.co.jp/mv/mplus/feature/post_50339/
 (最終閲覧日 2013年12月5日)において視聴可能.
- 15) 「ハロマイ」については, IV章1(3)で説明.
- 文 献
- 池下 誠(2011):「ESDの趣旨を踏まえた中学校社会科地理的分野の授業実践—批判的思考のプロセスを経ることを通して—」『地理科学』66-3, pp.133-140.
- 池下 誠(2012):「持続可能なオーストラリアのあり方—多文化主義の視点を通して—」泉 貴久・梅村松秀・福島義和・池下誠編:『社会参画の授業づくり—持続可能な社会に向けて—』古今書院, pp.60-66.
- 伊藤裕康・北堀宏・三野健(2012):「学部教員と附属学校園教員とのC・T授業によるESD授業の開発(1)」『香川大学教育実践総合研究』24, pp.119-131.
- 大西宏治(2008):「持続可能な開発のための地理教育に関するルツェルン宣言(全訳)」『新地理』55-3・4, pp.33-38.
- 国立教育政策研究所(2012):『学校における持続可能な発展のた
 めの教育(ESD)に関する研究[最終報告者]』, pp.1-11.
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_saishuu.pdf
 (最終閲覧日:2013年12月17日).
- 「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議(2011):「我が国における『国連持続可能な開発のための教育の10年』実施計画」, 24p.
<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kokuren/keikaku.pdf>
 (最終閲覧日 2013年12月17日).
- 高田準一郎(2012):「1960年代のユネスコ教育実験からみたESDを担う地理教育の課題—教育実験『東南アジアの研究』を事例にして—」『地理教育研究』10, pp.18-27.
- 中村光則(2011):「高等学校地理AにおけるESDの授業の実践—チェックシート型と視点整理型の2つのアプローチによる試み—」『地理科学』66-3, pp.141-151.
- 中山修一・高田準一郎・和田文雄(2012):「持続発展教育(ESD)としての地理教育」『E-journal GEO』7-1, pp.57-64.
- 永田成文(2011):「多文化共生を考える小学校社会科における異文化理解学習—ESDの視点を導入して—」中山修一・和田文雄・湯浅清治編:『持続可能な社会と地理教育実践』古今書院, pp.71-79.
- 永田佳之(2010):「持続可能な開発のための教育(ESD)と国際理解教育」日本国際理解教育学会編:『グローバル時代の国際理解教育—実践と理論をつなぐ—』明石書店, pp.214-218.
- 日本ユネスコ国内委員会(2012):『ユネスコスクールと持続発展教育(ESD)』日本ユネスコ国内委員会事務局, 32p.
- 文部科学省(2009):『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』, 124p.
- 米田伸次(2010):「国際理解教育の未来に向けて」日本国際理解教育学会編:『グローバル時代の国際理解教育-実践と理論をつなぐ-』明石書店, pp.236-237.
- ESD-J(2006):『ESDがわかる!』, 20p.
<http://www.esd-j.org/j/documents/esdgawakaru.pdf>
 (最終閲覧日 2013年12月17日).
- UNESCO作成, 松井上席研究員訳(2004):『仮訳(未定稿)国連持続可能な開発のための教育10年2005-2014国際実施計画案』, 65p.
http://www.esd-j.org/j/documents/DESD_J_Draft2.pdf
 (最終閲覧日:2013年12月17日).